

ダニエル書 - 第五十四号

終末を解き明かす：理解を求めるダニエルの探求

Jeff Pippenger

2024-01-18

私たちは最近の記事を『預言者と王たち』の一節で締めくくりました。そこでホワイト姉妹は、ダニエルが「エレミヤを通して預言された七十年の捕囚が、彼が幻の中で天の訪問者が神の聖所の清めの前に経過すべきだと宣言するのを聞いた二千三百年と、どのような関係にあるのか」を理解しようとしていたと述べています。

さらに別の幻を通して、将来の出来事にいっそうの光が投げかけられた。そしてこの幻の終わりに、ダニエルは「聖なる者のひとりが語り、もうひとりの聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った、『この幻はいつまで続くのか』」のを聞いた（ダニエル書8:13）。与えられた答え、「二千三百日；そのとき聖所は清められる」（14節）は、彼を当惑させた。彼は熱心にこの幻の意味を求めた。彼には、エレミヤを通して預言された七十年の捕囚が、神の聖所の清めがなされるまでに経過すべき期間として、幻の中で天の使者から告げられた二千三百年とどのような関係にあるのか、理解できなかった。御使いガブリエルは一部の解き明かしを与えたが、預言者が「この幻は…多くの日にわたるものである」という言葉を聞いたとき、彼は気を失った。「私ダニエルは気絶し、幾日かの間病み、後に起き上がって王の公務に当たった。私はその幻に驚いたが、これを理解する者は一人もいなかった」と、彼は自らの経験を記している（26、27節）。『預言者と王』553、554ページ。

ミラー派は、彼らが宣べ伝えた根本的なメッセージを完全に理解するには至らなかった。ユダ族の獅子が「七つの時」についてさらに多くを明らかにしようとされた時が来ると、彼らはラオデキアの状態へと移行し、七年後には「七つの時」の光を完全に退けてしまった。彼らは、ダニエルが熱心に理解しようと求めた七十年と二千三百年の全体的な関係を、決して見出すことはなかった。ダニエルは終わりの時代の神の民を象徴している。

地がその安息を享受することは、古代イスラエルに与えられた契約の一部であり、その契約には、七年ごとに土地を休ませることという「光」が含まれていた。その契約には、七年の周期を七回繰り返すことも含まれていた。七つの七年周期（49年）の終わりには、ヨベルと呼ばれる祝いの年に、財産の返還および奴隷の解放・回復が行われることが含まれていた。ユダヤ人はこれらの契約の原則に不従順であり、歴代誌下は、預言者エレミヤが語った七十年の捕囚が、それ以前の四百九十年にわたる反逆を表していると示している。四百九十年のあいだに、もし古代イスラエルがレビ記二十五章に定められた契約の指示に従っていたなら、土地が休む年は合計七十年になっていたはずである。聖書における一年は三百六十日であり、三百六十日に七（「七たび」）を掛けると二千五百二十日になる。

七十年は地の安息と切り離せない関係にあり、その地の安息は「七つの時」とも切り離せない関係にある。ダニエルは、「神の聖所のきよめ」までの「二千三百年」と「七十年の捕囚」との「関係を理解」しようとしていた。したがって彼は、「chazon」の幻と「ma

reh」の幻の関係を理解しようとしていた。レビ記二十五章と二十六章にある地の安息と、エレミヤが語る七十年の捕囚を認めないかぎり、その関係を理解することは不可能である。もしあなたが「七つの時」が二千五百年という預言的期間を表していると感じないなら、あなたは終わりの時代においてダニエルによって代表される者であることから自ら外れてしまう。ミラー派は「七つの時」を時の預言だと信じていたが、アドベンチズムはもはやそうは信じていない。

ダニエルは、ほかのすべての預言者と同様に、世の終わりにおける神の民を象徴している。また、彼が七十年（「七つの時」）と二千三百年との関係を理解したいと望んだことについてのホワイト姉妹の記述は、終わりの時代の神の民が持つべき願いを表している。先の記事で述べたとおり、1843年と1850年の図表に示されている真理で、ホワイト姉妹の著作において（繰り返し）直接裏づけられていないものは一つもない。

ミラーの宝石は終末の真夜中の叫びにおいて十倍も明るく輝き、その結果、それらはアドベンチズムの乙女たちに対する最後の試練を表すことになる。これらの宝石とは、ハバククの表に示された基礎的な真理であり、またミラーの部屋の中央にある机の上に置かれていた小箱の中の宝石のことである。基礎的な試練は最後の試練であり、同様に預言の霊の権威もまた最後の試練である。ミラーの夢において宝石として象徴された基礎的な真理を退けることは、同時に預言の霊を退けることでもある。

サタンのまさに最後の欺きは、神の御霊の証しを無効にすることである。「幻がなければ、民は滅びる」（箴言29章18節）。サタンは、真の証しに対する神の残りの民の信頼を揺るがすために、さまざまな方法で、またさまざまな手段を通して、巧妙に働く。彼は人々を惑わすために偽りの幻を持ち込み、偽を真と混ぜ合わせて、人々に嫌悪感を抱かせ、「幻」と名のつくものはすべて一種の狂信だと見なすように仕向ける。しかし、誠実な魂は、偽りと真実を対比することによって、それらを見分けることができるようにされる。『セレクトッド・メッセージ』第2巻、78ページ。

私たちは今、1798年から1844年にかけてミラー派の歴史の中で生じた知識の増大について扱っていますが、ミラー派が預言の適用において正しかったとしても、彼らは自らが興起した歴史的背景によって制約を受けていたことを認識しています。私たちは今や終わりの時にあり、アドベンチズムの最後の世代（第四世代）にいます。この時期、アドベンチズムは伝統や慣習（偽の宝石）にあまりにも教え込まれてきたため、もはや根本的な真理が何であったかを知らなくなっています。その真理が何であるかを知らないことは、アドベンチズムがそれらの真理の意義を理解することを妨げ、また、それらの真理を守り保つようにとの繰り返しの命令を無意味なものにしてしまいます。

ウライ川の幻に関するガブリエルの解釈をさらに進める前に、基礎的な真理と預言の霊の権威に関連するいくつかの点に触れておきます。現代の神学者たちは、次の箇所が、聖書における最も長い時の預言は二千三百年であることを示していると主張します。

キリストの初臨の際に「御国の福音」を宣べ伝えた弟子たちの経験は、彼の再臨のメッセージを告げ知らせた人々の経験に対応していた。弟子たちが「時は満ち、神の国は近づいた」と宣べ伝えに出て行ったように、ミラーとその協力者たちも、聖書に示された最長にして最後の預言期間がまもなく満了し、審判が近く、永遠の御国が打ち

立てられようとしていると宣言した。時に関する弟子たちの宣教は、ダニエル書9章の七十週に基づいていた。ミラーとその協力者たちにより与えられたメッセージは、七十週をその一部とするダニエル書8章14節の二千三百日の終結を告げるものであった。いずれの宣教も、同じ偉大な預言的期間の異なる部分の成就に基づいていた。

最初の弟子たちと同様に、ウィリアム・ミラーとその仲間たちも、彼ら自身、自分たちが担っていたメッセージの意義を完全には理解していなかった。教会に長く定着していた誤りが、彼らが預言の重要な一点について正しい解釈に到達するのを妨げた。ゆえに、神が世界に伝えるために彼らに委ねられたそのメッセージを彼らは宣べ伝えはしたが、その意味の誤解により失望を味わった。『The Great Controversy』351頁。

その箇所には、「ミラーとその仲間たちは、聖書に示されている最も長く最後の預言期間がまさに満了しようとしていると宣言した」とある。そして神学者たちは、その最も長く最後の預言期間とは二千三百年のことだと主張する。さらに彼らは、ホワイト姉妹がその箇所で特定しているのはこれであり、彼女は二千三百年の期間について直接言及しているのだと主張する。彼らは、七十年と二千三百年の期間の関係に盲目である。彼らは、ダニエルが理解しようとしていた光にも盲目である。

エレン・ホワイトはミラー派の一人であり、1843年のパイオニア・チャートと、F・D・ニコルズによって刊行された1850年のパイオニア・チャートに掲げられていたメッセージを知っていた。ニコルズが作成した1850年のチャートは、ジェームズとエレン・ホワイトがニコルズと共に暮らしていたまさにその時期に、ニコルズの自宅で準備された。聖書における最も長い預言期間で、これら両方のチャートに示されているものは、二千三百年ではなく、レビ記26章の「七つの時」である。

前の箇所を、二千三百年が最も長く、最後の預言的期間であることの靈感による特定だと主張するのは、ホワイト夫人の著作同士を互いに矛盾させることになる。もし彼女がこの箇所について神学者たちの主張を信じていたのなら、では彼女が「七つの時」を支持する図表を承認しているのはどういう意味になるのか。

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がある上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

自分たちの伝統や作り話を擁護しようとする者たちは、1843年の図表において「七つの時」の誤りの上に主が御手を置いて覆い隠しておられ、その御手を後になって取り除かれたのだと主張するかもしれない。しかし、その前提には問題がある。ホワイト姉妹は、主が図表の数値から御手を取り除かれた時を特定しており、その御手は1844年10月22日より前、最初の失望の直後に取り除かれていたからである。その出来事に関する彼女の証言の中で、正された誤りが何であったかが示されており、その誤りは「七つの時」ではなかったことは明らかである。

「主がなぜおいでにならなかったのかを理解できずに失望した忠実な人々は、闇の中に見捨てられたのではなかった。彼らは再び聖書へと導かれ、予言の期間を調べた。主の御手はその数字から取り去られ、誤りは明らかにされた。彼らは、予言の期間が184

4年にまで及ぶこと、そして予言の期間が1843年に終わることを示すために自分たちが提示していたのと同じ証拠が、むしろそれが1844年に終わることを証明しているのを見た。」『初期の著作』237ページ。

主の御手が『図表上の数字から取り除かれ、誤りが説明された』とき、彼らは『預言の期間が1843年に閉じられたことを示すために提示していたのと同じ証拠が、それらが1844年に終結することを証明していた』と認識した。最初は1843年に終わると考えられていた預言の期間は、1843年のチャートに示されており、このチャートは三百人のミラー派の説教者それぞれが用いたものである。そのチャートに示され、1843年に閉じるとされた預言の期間は、ダニエル書8章14節の2300年、レビ記26章の2520年、ダニエル書12章の1335年であった。最初の失望の後、主はその誤りから御手を取り除かれ、ミラー派は、1843年に預言の期間の終わりを示すために提示していた同じ証拠が、実際にはそれらの期間が1844年に終わったことを証明していたのだと認識した。

1850年の図表は1850年に作成され、1851年1月に発売された。エレン・ホワイトは、その図表がハバクク書の成就でもあると記し、1843年の図表についても同様に記した。その図表はまた、レビ記二十六章の「七たび」として最も長い預言期間を表していた。

私は、ニコルズ兄弟によるその図表の出版のうちに神がおられるのを見た。私は、この図表についての預言が聖書にあるのを見た。そして、この図表が神の民のために備えられているものであるなら、それが一人にとって十分であるなら別の者にとっても十分であり、また、もし一人がより大きなサイズで描かれた新しい図表を必要とするなら、皆も同じ程度にそれを必要とする。Manuscript Releases, 第13巻, 359.

ミラー派が「聖書に示されている最も長く、最後の預言期間がまさに満了しようとしている」と宣言したという事実にはホワイト姉妹が言及したのは正確だと主張するのは当を得ている。というのも、彼らは実際にそうしたからである。「最も長い」「預言期間」が二千三百年だと主張することは、ホワイト姉妹の証言をそれ自体に背かせ、また歴史的記録にも背くことになる。その作り話を信じることは偽りを信じることに等しく、終わりの日には偽りを信じることを選ぶ者は、真理を愛さないがゆえにそうするのだ。

イエスは、十字架の苦しみを通り抜けるために、何らかの神的な麻酔を自らに奇跡的に施したのではない。イエスは、被造物の誰ひとり耐えられないほどの神的な苦しみを負われた。それでも人類は彼のかたちに造られ、啓示は、人類もまた彼が打ち勝ったように打ち勝つべきだと示している。キリストが十字架の苦しみに耐え得たのは、彼が備えておられたある特質によるのであり、それは人類もまた備えているものである。

私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を注ぎなさい。彼は、その前に置かれた喜びのゆえに、辱めをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に座しておられる。ヘブル人への手紙 12:1.

イエスは、その前に置かれた目標があったゆえに十字架の苦しみに耐えられました。そして私たちは彼のかたちに似せて造られており、その意味で、目標によって動機づけられる存在です。これは私たちの本来の造りの一部です。もし私たちが、アドベンチズムの土台を理解することは重要ではないと信じ込まされているなら、まさにそのことを行う動機を持ってなくなるでしょう。そのラオデキア的状态を克服するために聖霊によって呼び起

こされうる唯一の神からの動機は、真理への愛です。真理への愛は、私たちの耳のかゆいところをくすぐるように仕組まれた安易な慣習や伝統が身近にあることによって試されます。もし、ラオデキア的な安逸の中で、自分自身で真理を理解しようという願いを持たないなら、私たちは滅びます。これが今日のアドベンチズムの現状です。

ダニエルは、終わりの時代において、預言の言葉を通して七十年の捕囚と二千三百年の預言の関係を理解しようとする神の民の模範である。二千三百年の預言を最長にして最後の預言期間と見なすことは、アドベンチズムの基礎的真理を否定し、同時に預言の霊の権威をも否定することになる。ミラー派が最長かつ最後の預言期間として提示したものが二千三百年であったと主張することは、歴史的記録を否定することに等しい。

将来を恐れる理由は何もない。ただし、主がこれまで私たちを導いてこられた道と、過去の歴史における主の教えを忘れてしまうときは別である。『Life Sketches』 196頁

ガブリエルは、「mareh」と「chazon」という二つの幻についてダニエルに理解を与えるために来て、両者に明らかに預言的な関係があったにもかかわらず、二つの幻を心の中で区別するよう彼に指示した。その幻には、第7章と第8章における聖書の預言の諸王国が含まれており、それらは第2章に記されている同じ諸王国の繰り返しと拡大であった。その情報には、神の聖所と民が踏みにじられることとして一方の幻を、そして民と聖所の回復の業としてもう一方の幻を示す天上の対話が含まれていた。

ガブリエルがその解釈を示したとき（それは最終的にミラー派が宣べ伝えたメッセージの中心となった）、二つの幻の間には、解釈を区別して考えるようにとの命令に従う者が留意すべき関係が存在していた。相違点の一つは、いずれも“determined”と訳されている二つの語によって示されている。

あなたの民とあなたの聖なる都について七十週が定められている。背きを終わらせ、罪に終止符を打ち、不義のための贖いをなし、永遠の義をもたらし、幻と預言を封じ、至聖なるものに油を注ぐためである。ゆえに知り、悟れ。エルサレムを復興し建てるようにとの命令が出てから、メシアなる君に至るまで七週、さらに六十二週がある。広場も城壁も、苦難の時代に建て直される。そして六十二週の後、メシアは断たれるが、彼自身のためではない。やがて来る君の民が、その都と聖所を滅ぼし、その終わりは洪水のように襲い来る。戦いの終わりまで荒廃が定められている。彼は一週のあいだ多くの者と堅く契約を結ぶ。だがその週の半ばに、彼はいけにえと供え物をやめさせ、忌むべきものはびこりのゆえに荒れすたれさせ、終結に至るまで、定められた裁きが荒れすたれた所に注がれる。ダニエル書 9:24-27。

七十週（四百九十年）が民と聖なる都の上に定められている。「定められている」と訳される語は「切り取る」を意味し、その語はユダヤ人とエルサレムのための一定の期間、すなわち猶予の時を指し示している。またそれは、エルサレムの破壊と七十年の捕囚を招いた反逆の期間をも表していた。四百九十年はこうして「定められ」、第三の勅令から始まる。最初の四百九十年にわたる反逆は、ネブカドネザルによる三度の攻撃、最終的なエルサレムの破壊、そして文字通りのイスラエルが文字通りのバビロンにおいて離散と七十年の捕囚に遭うことをもたらした。

第一の勅令は、捕囚の終わりとエルサレム再建事業の始まりを画した。第三の勅令は、二千三百年の始まりを画した。第一の天使の到来は、靈的バビロンにおける靈的イスラエルの千二百六十年に及ぶ捕囚の終わりを画し、さらに四十六年の期間の始まりを画し、その期間にキリストはミラー派を用いて彼らを捕囚から出させ、靈的な神殿を築かせた。

二十六節と二十七節で二度「determined」と訳されている語は「charats」で、「傷つける」と「定め（布告）」を意味します。最初の憤りの終わりに、教皇権が致命的な「傷」を受けることが、預言的に「定め」られていました。これは、ダニエルが十一章三十六節で用いているのと同じ語です。

その王は自分の思うがままに行い、自らを高くし、すべての神々にまさって自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就する時まで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

36節では、「王」は教皇権を指す。教皇権は1798年まで栄えることになっており、その年に致命的な傷を受けた。ついで最初の「憤り」は「成就する」ことになっていた。というのも、その「憤り」は「行われる」ことが「定められていた」（布告されていた）からである。紀元前723年に始まり1798年に終わったイスラエル北王国に対する最初の「憤り」の終わりに、教皇権は「致命的な傷」を受けた。「determined」という語は「傷」を意味する。

そして、獣の頭のうちの 하나가死に至るほどの傷を負ったかのように見えたが、その致命傷は癒された。すると、全地の人々は獣に驚嘆して従った。ヨハネの黙示録 13:3

ミラー派の予言的枠組みは、異教と、それに続く教皇制という、荒廃をもたらす二つの勢力に基づいていた。彼らは、ダニエル書8章13節の「chazon」の幻に示されているとおり、これら二つの勢力が聖所と軍勢を踏みにじるものだと理解していた。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると、別の聖なる者が、語っていたあの聖なる者に言った。「日ごとのささげ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きは、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることになるまで、いつまで続くのですか。」
ダニエル書 8:13.

荒廃をもたらす教皇権は、千二百六十年間、聖所と軍勢を踏みにじるはずであった。

しかし、神殿の外の庭は除外し、測ってはならない。そこは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月のあいだ聖なる都を踏みにじるであろう。また、わたしはわたしの二人の証人に権威を与える。彼らは荒布をまとめて千二百六十日のあいだ預言するであろう。ヨハネの黙示録 11:2、3.

1798年、第一の憤りの終わりに、預言により教皇権を「傷つける」ことが定められていた。ダニエル書9章では、その定めは最後の二節に示されており、そこでは二度「determined」と訳されている語が「chazon」の幻に結び付けられている。一方、24節で「determined」と訳されている語は別のヘブライ語で、「mareh」の幻に関連している。終わりの時の神の民を代表するダニエルは、ガブリエルが心の中で区別しておくように告げたその二つの幻の関係を理解しようとしていた。

この話題は次の記事で続けます.

「神は私たちに新しいメッセージを与えておられるのではありません. 私たちは、1843年と1844年に私たちを他の教会から引き出したそのメッセージを宣べ伝えるべきです.」 『レビュー・アンド・ヘラルド』 1905年1月19日.